

手^{しゅ}

巾^{きん}

(駒沢女子短期大学学監 教授)

東 隆 真

手^{しゅ}
巾^{きん}

家人に、「手巾ということばを知っているか」とたずねたところ、「知らない」ということでした。

そこで、『広辞苑』（岩波書店刊）を開いてみました。

「手巾」という項をまとめてみますと、

(1) てぬぐい、てふき、ハンカチ

(2) 僧侶の語で、うなぎのこと

(3) 手巾帯のこと。僧侶が用いる長さ五尺ばかりの手巾のような腰帯。

右のようです。

昨今、手巾ということば、そしてその意味など、ほとんど知られなくなっているのではないのでしょうか。

しかし、禅宗では、手巾ということばは、今も用いられています。

洗面、入浴のときなどに顔や手を拭いたり、ころもの袖をからげるときに使う布のことです。

これに、個人用のものと、公界くが（僧堂、浴室、

後賀などの公共) 用のものと二通りあります。

一幅で、長さが一丈二尺、その色は白色以外の色となつています。だいたい、白色の衣類は、インドでは在家人が着て、出家僧は着ないことになつています。白衣舎とは、だから在家人の家を指します。日本の坊さんは、ころもの下に、白衣を着たりして、だいぶ様子が變つてきています。

手巾のことは、『梵網經』とか『大比丘三千威儀經』などというお経にちゃんと出ていますから、インドから中国へ、そして日本に伝わつてきているわけです。

わが国では、とくに鎌倉時代から、禪宗で用いられて来たのですが、今はほとんど見なくなりました。

これは、さきの『広辞苑』の(1)に相当するでしょう。

なお、手巾のことを淨巾ともいうとする説が

ありますが、これは少し乱暴な解釈です。

淨巾は、飯台や食卓を拭く布、食事をするとき、お袈裟やころもがよごれないように膝をおおう布のことです。

また、行脚の道中などで、大小便を行う場合、必らずお袈裟やころもを脱がなければなりません。が、脱いだものをつつむための布も淨巾といわれています。

大きさは、一巾、二尺ばかりの長さ。生地は木綿です。

次に、これは禪僧に多いのですが、曹洞宗の場合ころもや改良服を着るとき、腰の上部に、黒色、茶色、紫色などの絹を編んでつくった環状の紐を二重、三重にまいていますが、あれを手巾といえます。

臨済宗や黄檗宗の僧は、黒色の太い丸い手巾を二重巻きにして、正面は飾り結びとか組み紐のようにしています。

青く剃りあがった頭、たくしあげた麻のころも、素足に下駄をはいて、手に綱手笠をもっている雲水さんを、京都や鎌倉の街かどで見かけることがあります。よく見ると、腰のあたりに、手巾をしめています。

この手巾は、『広辞苑』でいえば(3)になるでしょう。

江戸時代のことですが、このごろの僧は、腰に帯を巻いて手巾と名づけて風流をきどつているとなげいている書物もあります。

なるほど、手巾は、一種の坊さんのおしゃれなのかも知れません。しかし、私などに言わせれば、ころもをだらりと着て手巾をしめていない坊さんのすがたは、なんとなくしまりがないうように見えてしまいます。きりつとひきしまった禅坊主の風格を感じることができません。

それに、手巾は、風流やおしゃれというばかりではなく、けわしい山を登り、海や川をわた

るとき、ころもをたくしあげたり、あるいは作務(労働)のとき、袖をおさえる襷の役目もしますから、かなり実用性があるのです。

いま、手巾といえば、禅僧(とくに曹洞宗の僧)のあいだでは、この腰紐のことを頭にうかべることになります。

帽子

もうすと発音します。禅宗以外でも、もうすとよんでいる場合があるようです。中国の古い音が、いまもそのまま使われているのです。もうすは、もちろん頭にかぶる帽子のことです。坊さんが外出するとき、改良服を着て茶人帽や不老帽をかぶります。

茶人帽というのは、お茶人や俳句の宗匠などがかぶる帽子のかたちに似ています。ふつう利休帽ともよんでいます。利休居士や芭蕉の肖像

画をみて気のついたお方もあるでしょう。

不老帽というのは、一種の頭巾ツバです。大黒だいこくさんの帽子に似ているので大黒帽ともいいます。

中国の洛陽、白馬寺を訪れたとき、白馬寺の坊さんが、たしか不老帽をかぶっていたと記憶しています。日本山妙法寺のお坊さんも、たぶん白色や黄色の不老帽をかぶっているようです。

それから、お寺で正式の儀礼を催したり、檀信徒の仏事供養を行うときに、主役の僧、たとえば住職や導師などが帽子をかぶって登場します。

この場合の帽子は、いろいろの種類しゅるいがあります。それは、いわば坊さんの地位、役職によってことなるのです。先端せんたんが烏帽子えぼしのようにとがっている長い帽子を、立帽子たちぼうしといいます。それから、六陵形ろくりやうの六角帽かくかくぼう、アフリカ駐在しゅうざいのフランス兵の帽子に似ている鼓山帽子こざんぼうしなどです。

ところで、曹洞宗の坊さんが、絹布などでつ

くった白色のえりまきを首にかけていることがあります。これは護衿ごきんといえます。

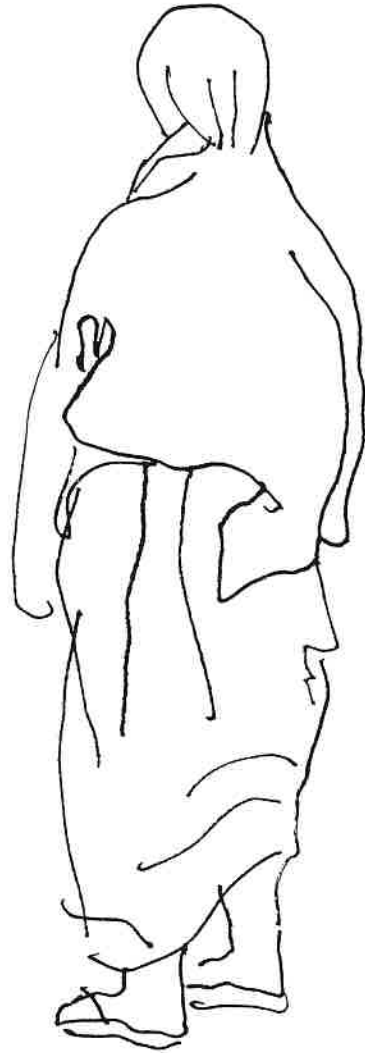
しかし、この白いマフラーのようなものが他宗においては帽子の一種なのです。天台宗、真言宗、日蓮宗では帽子、浄土真宗では帽子なし半帽子、浄土宗では領帽などとよんでいます。帽子のことは、『四分律しふぶんりつ』というお経に出ています。

お釈迦さまがベイヤリにいらつしやったとき、ひとりの修行僧が帽子をかぶってやってきました。

そして、帽子の着用を認めてほしいとうったえました。

しかし、お釈迦さまは、修行僧は帽子をかぶってはならない、帽子をかぶるのは在家人の作法であるとお許しになりました。

ところが、その後、お弟子たちが頭かぶが冷えて痛いというので、着帽けいぼうを認められました。毛氈げい(細



くてやわらかい鳥の毛)、結貝で頭をつつみ帽子をつくるようにとおっしゃった——。

西城では帽子を脱ぐのが礼儀とされているようです。

たとえば『大比丘三千威儀經』には、まず部屋に入るときは、あらかじめ弾指だんし(指をはじく。いまのドアをノックすることにあたる)し、入

ったら帽子を脱ぎ、次に挨拶をする。次に指示された場所にすわる。次にみだりにお経を持って入室してはならないなどがあります。

江戸時代のことですが、日本の臨濟宗では帽子をかぶる時期はお寺によってちがいました。南禅寺は十月五日、相国寺は九月九日、大徳寺は九月九日、九月二十一日、十月一日、十月四

日、妙心寺は十月一日、十月四日というように、お寺によって時期がことなっていたばかりではなく、その立場や地位によっても同じではなかったようです。

いま、曹洞宗では、帽子は防寒のためというよりも、装飾のために盛んに使われていると言つてよいかも知れません。

私は、学生時代に師匠のお寺に帰って、大本山総持寺祖院の朝課（朝のおつとめ）に随喜しました。

十二日、一月の厳寒、北陸能登の早朝はほんとうに寒い。祖院の大祖堂の堂内は冷えきって、まるで冷蔵庫のなかにいるみたいです。しかし、そんなときでも、誰も帽子などがぶつて朝課をつとめる坊さんはおりませんでした。

大本山総持寺のご開山螢山禪師が制定された『螢山和尚清規』を見ますと、十月一日、炉を開き、「頭帽を許すべし」とあります。してみる

と、総持寺や永光寺（能登）、大乘寺（加賀）など螢山禪師のお寺では、螢山禪師のころ、十月一日から帽子をかぶることをみんなに対して認めていたことがわかります。そして、三月一日、炉を閉じ、「頭帽を脱ぐ」とあります。

しかし、正月一、二、三日の祝聖修正の法要のときは、主人（住職）も大衆（住職以外の僧）も「頭帽を著せず」とありますから、このときばかりはどんなに寒くても帽子をかぶつてはいけないのです。

以上、禪宗（曹洞宗）を中心にして帽子のことを申しあげました。

前号で、杜多に、うっかりずだとふり仮名をつけましたが、とだの誤りです。訂正します。